

そのうち年が暮れて春になりました。ある日奥さんがKにかかるたをやるから誰か友達を連れてこないかと言ったことがあります。するとKはすぐ友達などは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往來で会ったとき挨拶をするくらいのは多少ありましたが、それらだつて決してかるたなどを取る柄ではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知った者でも呼んできたかどうかと言ひ直しましたが、私もあいにくそんな陽気な遊びをする心持ちにならないので、いいかげんな生返事をしたなり、うちやつておきました。ところが晩になってKと私はとうとうお嬢さんに引つ張り出されてしまいました。客も誰も来ないので、うちうちの小人数だけで取るうというかるたですからすこぶる静かなものでした。そのうえこういう遊技をやりつけないKは、まるで懐手をしてゐる人と同様でした。私はKにいったい百人一首の歌を知っているのかと尋ねました。Kはよく知らないと答えました。私の言葉を聞いたお嬢さんは、おおかた軽蔑するでもとつたのでしよう。それから目に立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人がほとんど組になつて私に当たるといふありさまになつてきました。私は相手しだいではけんかを始めたかもしれないのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかった私は、無事にその場を切り上げることができました。

それから二、三日たった後のことでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くと言つてうちを出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも嫌だったので、ただ漠然と火鉢の縁に肘を載せてじつと顎を支えたなり考えていました。隣の部屋にいるKもいつこう音を立てませんでした。双方とも居るのだから居ないのだから分らないくらい静かでした。もつともこういうことは、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかったのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃になつて、Kは不意に仕切りのふすまを開けて私と顔を見合わせました。彼は敷居の上に立ったまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったのです。もし考えていたとすれば、いつものとおやお嬢さんが問題だったかもしれないかもしれません。そのお嬢さんには無論奥さんもくつついていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる巡つて、この問題を複雑にしているのです。Kと顔を見合わせた私は、今までおぼろげに彼を一種の邪魔者のごとく意識していながら、明らかにそうと答えるわけにいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKのほうからつかつかと私の座敷へ入ってきて、私の当たっている火鉢の前に座りました。私はすぐ両肘を火鉢の縁から取りのけて、心持ちそれをKのほうへ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行つたのだらうと言うのです。私はおおかた叔母さんの所だらうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君だと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過ぎだのに、なぜそんなに早く出かけたのだらうと質問するのです。私はなぜだか知らないとい挨拶するより外にしかたがありませんでした。